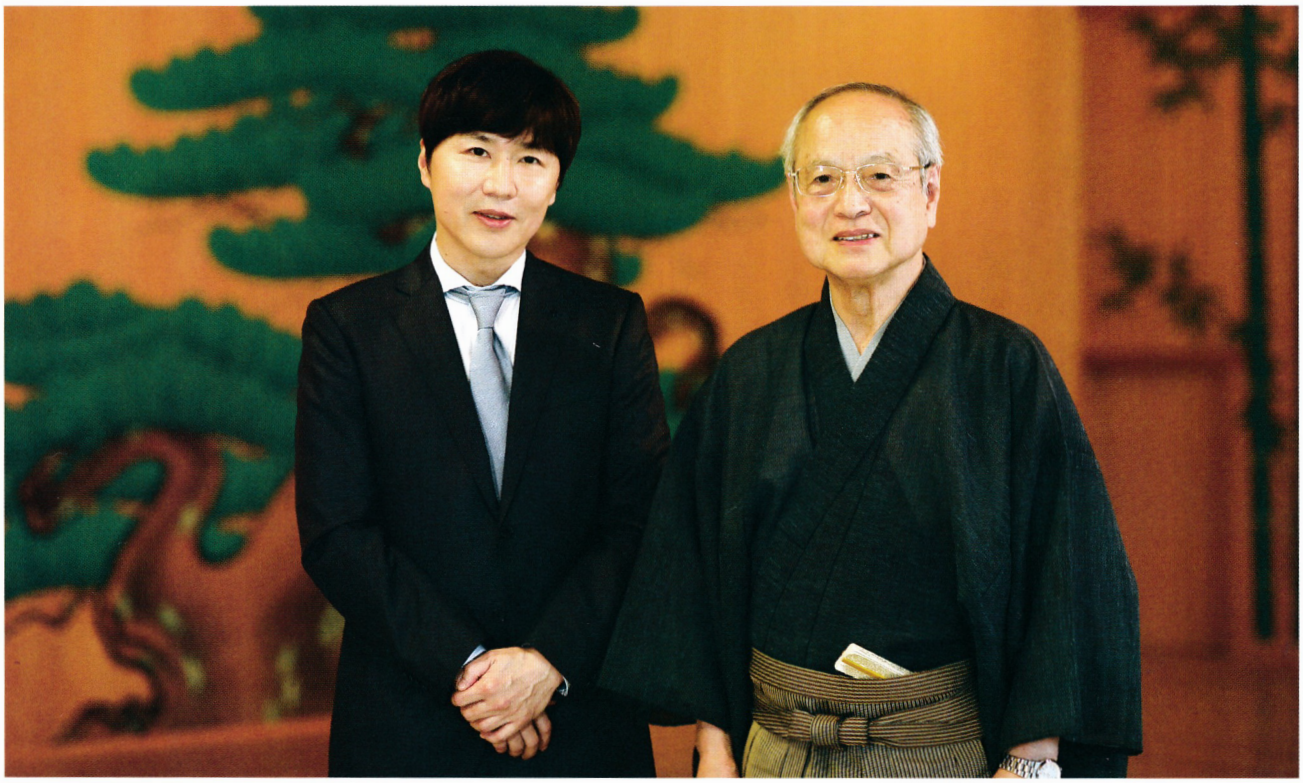
人間国宝　　飛鳥山薪能実行委員会 会長

野村万作×大前孝太郎

飛鳥山薪能スペシャル対談

第一回目から飛鳥山薪能に出演して頂いている人間国宝でもある野村万作氏と、今年から飛鳥山薪能の会長に就任した城北信用金庫理事長/東京北区観光協会会長の大前孝太郎氏の対談をお送りする



左：大前孝太郎氏　右：野村万作氏　司会：田村事務局長

司会
野村先生は、初回から第十六回までご出演をいただいております。これまでを振り返りまして、飛鳥山薪能に対してどのような印象を持たれておられますか。

野村万作氏（以下：野村）
田端で育ち、上中里、飛鳥山、あるいは名主の滝など、北区にはいろいろご縁があります。亡き父親と、名主の滝で金魚を捕ったことなどを思い出します。
巣鴨で生まれて、幼稚園の頃から田端に引っ越しまして。聖学院の幼稚園に通ったこと。そして、今は残念ながら廃校になってしまった滝野川第一小学校に通ったこと、そこから小石川の都立第五中学校に通ったこと、戦災で焼け出されたときのこと、などなど。飛鳥山には小学校のときよく遠足に行きましたし、中里のあの広い通り、あそこは小学校の時に100メートルの速さを計る場所でした。そのようなことも、私はかけっこが早かった方だったので思い出されます。そういうご縁のある飛鳥山で薪能が行われて。やっぱり木村さん（故・木村薫哉氏：能楽師）とのご縁も含めて、いろいろ思い出すことがあるので。他にも薪能はありますけれども、気持ちがとっても入りまして、一生懸命やらせて頂き、なおかつ、幸いにもずっと続けて出演させて頂いておりますことは、大変ありがたいことだと思います。

司会
ありがとうございます。飛鳥山薪能は、故・木村先生が飛鳥山公園にある舞台を見て「是非、ここで薪能やりたい」と思い立たれて、すぐ、野村先生にお願いに行って、第1回目からご出演していただくような形になりました。
北区のご縁でこうした薪能が始まったこと、本当に私ども地元に住む者としても、ありがたく存じております。
大前会長は昨年東京北区観光協会の会長として、野村四郎先生とご対談をなされて、今年は飛鳥山薪能実行委員会の会長にご就任いただきました。薪能についてどんな印象をお持ちか、お聞かせいただけますか。

大前孝太郎（以下：大前）
先ほど万作先生から、飛鳥山の思いというものもお話をいただきましたけれども、昨年この企画で野村四郎先生ともお話をさせていただきました。北区の観光にとりましても、非常に伝統・歴史のあるエンターテインメントとしての飛鳥山薪能には、いろいろな観点からインスパイアを受けております。
先日観光協会の主催で、飛鳥山薪能と同じ舞台を活用した「音の滝」という音楽フェスを初めて開催させていただきました。約五〇〇〇人ほどのお客様にご来場いただきました。けれどもまだまだ飛鳥山はエンターテイメントとしての活用が少ないと思っております。薪能のようなコンテンツを一つでも多く増やして、北区に興味を持っていただく方を一人でも増やしたいという思いから企画をしたイベントでございました。二〇二一年NHKの大河ドラマでは、飛鳥山に居を構えられた渋沢栄一翁の生き様をテーマにするということが決定されているようでございまして、ますます注目度も高まっております。この中でより良いコンテンツ、皆さんが楽しめるようなエンターテイメントを作っていくという意味で、その先頭に飛鳥山薪能が立っていただいて、それを引っ張っていっていただくようなものになれば、よろしいのではないかなと、願っているところでございます。

司会
ありがとうございます。野村先生にお伺いしたいのですが、先ほど田端に稽古場があり、小学生の頃の思い出もおありだと承っておりますが、ご自身の芸を次の世代に伝えていくことを、どのように考えられておられるかお聞かせくださいますか。

野村
これは時代と共になかなか難しくなってきていると思います。その一つには、日本語の言葉の理解度が、狂言の場合大切なんですね。能は、感性で捉えれば難しい言葉やなんかを除けても、音楽的にも舞踊的にも楽しめる面がありますが。狂言は、「理解する」っていうことがとっても大事なので。その理解のためには、言葉が分からないと辛いんですね、私たちとしては。その意味では、段々に言葉が分かり辛くなっているように思っておりますので、それを伝えていくこれからの人たちは、大変だなあという思いがいたします。実は一昨日まで、台湾の高雄に行ってまして、そこで字幕を使って狂言をやりますと、日本で狂言を普通にやるよりも、字幕がその国の現代語に訳されるものですから、中身がよく分かって大喜びで、本当に怒濤の如き笑いが起こるんですね。
そういうことは、やはり現代語になっているその理解力のお陰なんだと。ところが私ども古典の演者は、日本語の古典の狂言を現代語にするということをしないわけです。「しちゃいけない」と、みんなそう思っているわけですね。日本の若い方々も一部は、「分かりやすい」とおっしゃいますけども、段々に分かりにくくなる恐れがありますので。なんとか学校教育の中の、国語の古典として大きく取り上げて頂いて、そこを埋めていっていただけるといいなあと思ってますね。

司会
私どもは古典で習うこともありました。若い人たちにも言葉がどういうふうに生まれてきて、なんのために、どのように、表現されておられるかを、教えていただけると大変ありがたく存じます。また、大前会長にお聞きしますが、野村様も住んでおられた田端は北区の中でどのような街でしょうか。

大前

万作先生はよくご存知のことと思いますけれども、田端は昔、芥川龍之介を筆頭に、文士村として文士の方、芸術家の方が集まる街として非常に注目をされていました。

今から20数年前に「田端文士村記念館」というものができまして、そこにファンが訪れるようになりました。最近では文士たちをテーマにした「文豪ストレイドックス」というアニメーションがあるようでございますが、その影響で若い方々も田端に訪れるということになったりしています。それから「君の名は。」という映画で有名な新海誠監督の映画の最新作、「天気の子」の登場人物が田端に住んでいて、メインの舞台になったりとですね、注目をされているスポットだとは思います。北区の中で唯一の映画館で、ユニバーサルシアターの「シネマ・チュプキ・タバタ」というのも田端にできているそうでございまして。なかなか感度の高い面白い方々が、近年続々と集まっているような印象を持っております。

司会

ありがとうございます。

今若い方々の中に「狂言が面白い」という方が多く増えておりまして。そんな若い方々に向けて、これから能と狂言の結び付きについて、お考えをお聞かせ頂きたいと思います。

野村

能と狂言というのは、一緒にずーっと同じ舞台で交互にやってきた古くからの伝統があります。従って、狂言は能と能の間に挟まる、喜劇的な面を背負ってきましたけれども、演技の様式は、能と共通なものが当然あるわけですね。能をつくった世阿弥という人も、「能に匹敵するような幽玄の質がなくてはいけない」と言っています。ということは、今の流行っている「笑わせてなんぼ」という言い方がよくありますが、いわゆるコメディアンの方々がやってる笑いとは違うわけです。見る人が自然に笑うのだと。だから演者が、一つの戒めとして、私は「狂言は美しく、面白く、最後におかしくなんだよ」と弟子たちに言っています。

ある種の上品な笑い、と言うとつまらない言い方ですけれどもね。深みがあるとか、げらげら笑うのではないけど面白いとか。そういう、人生が豊かになるような。つまり具体的に言えば、頭を叩いて笑うんじゃなくて、あるいは手を叩いて笑うんじゃなくて、「心から和む」という世界を、つくっていくことによって、能と狂言が一緒にやる意味があるんではないかと思っています。

司会

ありがとうございます。今年はラグビーのワールドカップで日本に海外の方が溢れております。日本の伝統芸能である能にも、きっと興味を持っていらっしゃると思いますけれど、北区の観光協会会長として、インバウンドに対してどのような考えをお持ちか、話をお聞かせ頂けますか。

大前

北区は都心からのアクセスも良く、宿泊費の方はまだ比較的安いということで、実は宿泊する外国人の方々がとても多くてですね。問題はと言いますか、宿泊される方は外国人の方が多いんですが、地域にまだまだ楽しめるコンテンツが少ないものですから。宿泊で終わってしまうというのが、比較的これまでの状況だと思います。そういう意味では、外国人の方々も楽しめるコンテンツ増やすということ。そして情報、インフラ的な面でございますけれども、情報を多言語化していく、ある

いは外国人はもう通例になっているキャッシュレスの対応をしていく。こういったところが、非常に重要ではないかなというふうに考えております。

私が実行委員長を務めている北区花火会というのがございまして、より多くの外国の方々にもおいでいただきたく、「開催地の赤羽の魅力を知っていただこう」と、１００店舗の飲食店をＱＲコードで多言語の飲食店の情報とかメニューが見られるような取り組みを行いました。また、城北信用金庫では、北区を筆頭に、商店街や地域の個店のキャッシュレスの普及というものに取り組んでおりまして。「オリガミペイ」というＱＲコード決済のアプリを、様々なお店に導入頂いております。今年の花火会でも、キャッシュレスのエリアを設けまして、そこで気軽にキャッシュレスでいろんな飲食が楽しめるような取り組みも行っております。

今後もそうした様々なコンテンツを作ることと、そういった外国人の方々も馴染めるようなインフラ作りを行なって、多くの外国人観光客にも北区の魅力を知っていただきたいなというふうに思っているところでございます。

司会

ありがとうございます。外国人の方、今まで能を知らなかった方に、どのように感じて頂きたいかについて、お考えをお聞かせ頂ければと思います。

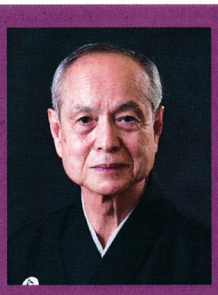
野村

能は、感性で見ていただければ、言葉の一つ一つを分かろうとしなくても、鑑賞に堪え得る要素がありますよね。音楽的な面からか、舞踊的な面からでも良いし。ドラマがある能もあれば、ほとんどドラマ的なものがない能もあるわけですね。狂言の方は、分かろうとして見ていただかないと。そのためには言葉が媒体になっているからということで、言葉の重要性があると。

加藤周一さんという有名な文学者が、「観客の想像力でつくり上げていくのが、日本の伝統芸能の独特なものなんだ」と。演者の方かから押しつけて「わかれ、わかれ」というのでなくて、観客の方が想像力豊かに考えて見る。「その素晴らしさなんだ」ということをおっしゃってますが、私大賛成で、そういう見方から、やはりそのために補助的な文明の利器を使っての、解説などによって、いくらでも参加していける要素があるのではないかとは思っています。

司会

どうもありがとうございました。本当にお二方、楽しいお話をありがとうございました。飛鳥山薪能としても、スタッフ共々もっともっとがんばってまいりますので、どうぞこれからもよろしくお願いいたします。



野村　万作

1931年人間国宝・六世野村万蔵家の次男として生まれる。1950年に二世万作を襲名。以降芸術祭大賞、日本芸術院賞、坪内逍遥大賞など受賞多数。1990年紫綬褒章受章。2007年 人間国宝に認定。2012年旭日小綬章受賞。2015年文化功労者。

大前　孝太郎

1987年旧住友銀行入行。1998年内閣官房特別調査員。2001年内閣府参事官補佐。2009年城北信用金庫常務理事を経て、2015年6月に理事長に就任。2017年1月に東京北区観光協会を設立し会長に就任。